

サバBN圧勝の意味と 「サバ人のサバ」のゆくえ

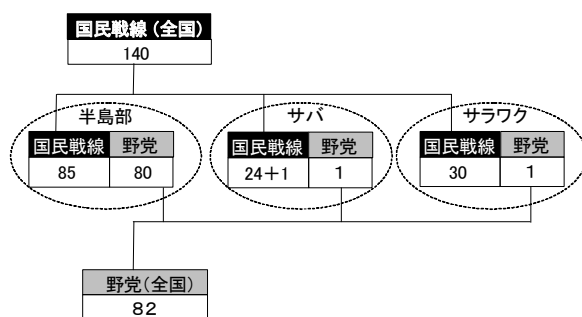
山本 博之 京都大学地域研究統合情報センター

0. はじめに

サバは、サラワクとともに、マレーシアのなかで例外的な存在として扱われることが多い。確かに、サバとサラワクはもともとマラヤ（半島部マレーシア）と異なる「国」であり、現在に至ってもマレーシアには国内に3つの「国」があると言っても決して言いすぎではない。マレーシア全体の統一性を高める努力もなされてきたが、サバは依然として連邦政府の支配が十分に及ばない地域であり続けている。

2008年3月の総選挙では、マラヤで与党連合の国民戦線（BN）が165議席中85議席という歴史的「大敗」を喫したにもかかわらず、サバではBNが26議席中25議席（ラブアンを含む）を獲得して圧勝した（図1参照）。

図1 2008年総選挙の結果（連邦議会）



この結果をどのように理解すればよいのか。かつて連邦のBN政権と激しく対立したサバは、いまやすっかりBNの支配下に入ってしまったと見てよいのか。別の問い方をすれば、サバ団結党（PBS）政権時代のサバが掲げた「サバ人のサバ」はもはや不要になったと見てよいのか。

上記の問いに答えるため、以下では、まずマレーシアにおけるサバの位置づけを簡単に確認したうえで、マラヤで発展した「民族の政治」がサバでは異

なる形で展開したことを整理し、独立後のサバにおける政党政治を民族の観点から概観する。その上で、サバで選挙や政党がどのように機能しているかを紹介しつつ、PBS政権が誕生した1980年代半ばから現在に至るサバの政党政治の展開を跡付ける¹。このなかにおいて捉えることにより、今回の総選挙でサバでBNが圧勝したことは、決してマラヤのBNの支配がサバに及んだことを意味しているわけではなく、むしろサバという枠組の意味が強まっていること、そしてサバ選出のBN議員が連邦全体の与野党の逆転のカギを握っていることが明らかになるだろう。

サバは、しばしばマレーシア内の「自治国」と位置づけられる。それを象徴的に示しているのが入境管理だろう。マラヤからサバに入るときには、国内の移動でもパスポートの提示が必要となる。他州出身のマレーシア人がサバで就労する場合、外国人と同様にサバ州の就労許可をとらなければならない。このほかにも、サバはマレーシアの一員でありながら、マレーシア結成の際の歴史的経緯により、マラヤと異なる法律が多く適用されている。

また、サバは「分離主義的傾向」でも知られている。独立以降1990年代まで、歴代のほとんどの州首相は何らかの形でサバの分離独立の可能性に言及してきた。1965年には、シンガポールの分離独立を受けてドナルド・ステファン前州首相がマレーシア協定の見直しを要求した。1975年にはムスタファ・ハルン州首相が石油法の導入に反対してサバの分離独

¹ サバ社会を概観するには[Anuar & Leong 1981][Kitingan & Ongkili 1989]が有益である。サバの政治と選挙については[Milne & Ratnam 1974][Ongkili 1972][Roff 1974][Tilman 1976][Luping 1994]を参照。木材生産業とサバの政治については、独立前夜までについて[Lee 1976]、ムスタファ政権時代について[Ross-Larson 1976]を参照。

立を示唆し、1990年にはパイリン・キティガン州首相の弟ジェフリー・キティガンがサバの分離独立運動を唱えたとして国内治安法（ISA）で逮捕された。

また、サバは、連邦の野党が統治する「野党州」であったことでも知られている。1985年、PBSが州議会選挙で勝利をおさめるとサバは野党州になった。このとき誕生したのが、カダザン人でキリスト教徒であるパイリン・キティガンを州首相とするPBS政権である。後にPBSはBNへの加盟が認められるが、「サバ人のサバ」を掲げて連邦政府と対立し、1990年の総選挙直前にBNを脱退することで、サバでは連邦と州で与野党のねじれ現象が生じた。1991年にはBN構成政党がサバに進出し、サバの政治はBN対PBSの時代となった。1994年の州議会選挙ではPBSが辛勝したが、選挙直後に州議会議員がPBSから大量移籍したためにPBS政権は倒壊し、BN政権が誕生した。2002年にはPBSがBNに復帰し、州議会がすべて与党議員となって2004年および2008年の総選挙を迎えた。

1. サバにおける民族と政党

(1) 「民族の連邦」とサバ²

まずマラヤの状況から見ておきたい。マラヤの政治体制の特徴は「バンサの連邦」と呼ぶことができる。バンサとはマレー語で民族を意味し、マラヤではマレー人、華人、インド人の3つを指す。3つのカテゴリーに属する人々は現実には文化的に多様であるが、共通の文化的指標を持つ人々と捉えられ、植民地下の社会制度などによって3つのカテゴリーが実体化していった。バンサは、独立・自治の準備として政党が導入される過程で、国政レベルの意思決定の場に代表を派遣する資格があると相互に承認されている枠組としての性格が与えられ、マレー人、華人、インド人の3つがバンサとして認知された。マラヤの公民は原則としてこの3つのバンサのいずれかに所属することとされ、これ以外にシャム系、ババ・ニョニヤ、ポルトガル系、オラン・アスリなど独自の文化的特徴を持つ人々がいっても独自のバン

サであるとは認められず、政治経済上の便宜を得るためにはいずれかの既存のバンサに所属することとされた。

これに対し、サバではマラヤと異なって民族間の社会的亀裂が明瞭ではなかった。1950年代になると先住北ボルネオ諸族のなかから民族名としてカダザン人を唱える動きが登場し、カダザン人、ムスリム原住民、華人の3つの民族集団があるとの認識が生まれた。ただし、「カダザン人」がどの範囲の人々を指すのか明確な了解があったわけではなかった。そのため、カダザン人、ムスリム原住民、華人のあいだで重なる部分もあり、3つの民族集団という分け方はあくまでも大雑把な目安にすぎなかった（図2参照）³。たとえば、サバでは華人名をもつけれどカダザン人として原住民の地位をもっているという人も少なくなく、名前で民族性や宗教が判断できるとは限らない⁴。

マレーシアは、マラヤ連邦と3つの自治州（シンガポール、サバ、サラワク）によって1963年に結成された（シンガポールは1965年に分離独立した）。マ

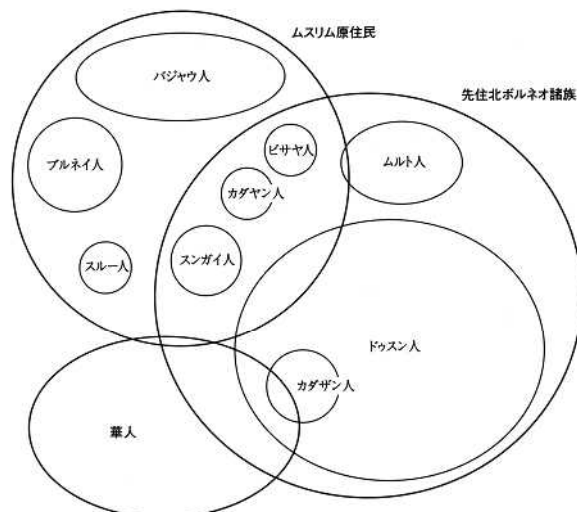


図2 1960年センサスにおける民族分類（概念図）

- (1) 主要民族カテゴリーのみ取り上げた。
- (2) 各区分の大きさはなるべく人口比を反映するよう心がけた。ただし、華人と先住北ボルネオ諸族の交わりの部分など、一部で実際の人口比を正確に反映していない箇所がある。
- (3) 「カダザン人」「先住北ボルネオ諸族」「ムスリム原住民」はセンサスにない分類で、筆者が書き加えたもの。

出所：Census 1960より筆者作成

³ サバの民族状況については[山本2006]を参照。

⁴ 華人名とカダザン人名を両方持ち、華人社会では華人として、カダザン人社会ではカダザン人として知られている人物も存在する。

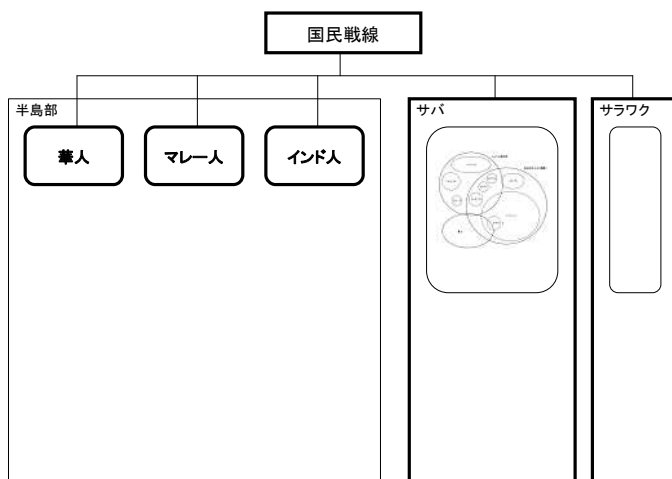
² マレーシアにおけるバンサ（民族）概念については[Ariffin 1993][山本2006]を参照。

ラヤにおける「バンサの連邦」を適用するならば、サバやサラワクのマレーシア公民もバンサの枠組を通じて国政レベルでの政治参加が認められるべきであり、サバとサラワクのマレー人、華人、インド人はそれぞれ対応するマラヤの民族政党への加入が認められるべきということになる。しかし、サバの複雑な民族状況をどのように切り分けてマラヤのバンサに対応させればよいか、当時のマラヤの政治指導者たちにはわからなかった。そのため、サバの住民はサバ州政府を通じてサバという枠組で連邦政府への参加が保証されることになった。

サバという枠組みによる政治参加は、サバに州自治が認められたことで制度的に保証されることになった。サバは州憲法と州議会を持ち、州政府が行政を担当する。他州と異なり、サバは連邦憲法で州の広範な自治が認められており、行政は州首相が実際の権限を持つ。州首相は州議会で多数を占める政党から選ばれる。州議会は、州で登録された有権者が州から出た候補者のなかから選挙を通じて選ぶ。マレーシア結成当初はマラヤの政党がサバに進出しなかったため、サバでは州内の政党が州議会選挙を戦うことになる。その結果として組織された州政府が州首相を長として州行政を担当し、マレーシア全体のことがらについては州政府が連邦政府と協力する。サラワクも同様であり、これによってマレーシアは5つのブロックから構成されるという仕組みが作られた(図3参照)。

全国レベルの意思決定の場に代表を派遣する枠組

図3 マレーシアにおける「民族の連邦」(概念図)



で、内部のできごととはそれぞれで担当するという構造から言えば、機能としては、マレーシアはマレー人、華人、インド人にサバ州とサラワク州を加えた5つのブロックから構成されていると見ることができる。ただし、マラヤのマレー人、華人、インド人はバンサと呼ばれるのに対し、サバとサラワクはバンサとは呼ばれない。サバとサラワクは、バンサという観点からは、マレー人、華人、インド人、その他という分類における「その他」として扱われることになる。このことは、サバの人々によって、サバがマレーシアで主流扱いされていないことと結び付けて理解されてきた。

(2) サバにおける政党構成原理と民族

サバでは独立前にいくつかの政党が結成され、独立の過程で統一全国パソ・モモグン＝カダザン人機構(UPKO)⁵、統一サバ国民機構(USNO)、北ボルネオ国民党(BUNAP)⁶の3つの政党にまとめられた。これらの政党はそれぞれカダザン人、ムスリム原住民、華人を主要支持基盤とし、連立してサバ連盟を結成した⁷。

これらの政党はマラヤの民族別政党に倣ったために民族別政党の形をとったが、サバ社会は民族の境界が明確でなかったため、サバの政党は厳密な意味で民族別政党ではなかった。いずれの政党も、執行部は特定の民族が多数を占めていたが、特定の民族のみの利益を代表する政党であると主張することはなかった。そのため、政党間で党員の引き抜き合いが絶えず、また、同一の人物が複数の政党に所属することも広く見られた。

独立直前の1962年から1963年にかけて、郡ごとに郡参事会のメンバーが選出され、郡参事会メンバーの互選で立法参事会メンバーが選出された。これら

⁵ 統一全国カダザン人組織(UNKO)と統一全国パソ・モモグン党(PM)が合併して1964年に結成された。

⁶ サンダカン基盤の連合党(UP)と西海岸基盤の民主党(DP)が1962年に合併して北ボルネオ国民党(BUNAP)として結成され、後にサバ国民党(SANAP)に改称した。さらに社会団体のサバ華人協会(SCA)と統合してSCAに改称した。

⁷ このほかに名目上の政党であるサバ・インド人会議(SIC)もサバ連盟に加盟していたが、SICは実体がないため、以下ではサバ連盟の構成政党を3つとすることがある。

の選挙ではサバ連盟の構成政党どうしで候補者の調整が成功せず、多くの選挙区でサバ連盟構成政党どうしの対立が見られた。しかし、サバ連盟以外の政党は存在しなかったため、選挙の結果、サバ連盟のUSNO、UPKO、BUNAPが議席を独占した。

1963年のマレーシア結成に伴うサバ州政府の誕生により、サバには象徴としての州元首と州行政の実権を握る州首相が作られた。州元首はムスリムが望ましいという連邦政府の意向によってUSNO党首のムスタファ・ハルンが州元首になり、UPKOのドナルド・ステファンが州首相に就任した。木材伐採の州営化政策などを巡ってサバ連盟内で対立が高まり、1964年12月にステファンは州首相を辞任し、SCAのピーター・ローが州首相に就任した。この体制は1967年まで続いた。

1967年、サバは独立後はじめての総選挙を経験した。サバ連盟の構成政党どうしで選挙協力が成立せず、多くの選挙区でサバ連盟どうしの戦いとなった。選挙の結果、サバ連盟がすべての議席を独占したが、第一党になったUSNOが第二党のUPKOを排除してムスタファを州首相とする州内閣を組織したため、UPKOはサバ連盟を離脱して野党となった。USNOとUPKOの対立が高まるなか、サバ人の統合を求めるステファンはUPKOを解散し、UPKO党员にUSNOに加盟することを求め、また、後に自らイスラム教に改宗して他のカダザン人にもイスラム教への改宗を呼びかけた。これにより、1967年から1976年まではUSNOを中核とするサバ連盟の統治時代となった⁸。

1967～76年にムスタファ率いるUSNOが州政府を担った後、1976～85年にハリス・サレー率いるサバ大衆団結党 (Berjaya) が、そして1985～94年にはパイリン率いるPBSがそれぞれ州政権を担った。BerjayaもPBSも多民族包括型の単独政党による州政権である。1967年の州議会選挙で民族別政党の連合体であるサバ連盟体制が崩壊した後は、多民族包括型の政党が単独で政権を担う形になった。これは、民

族が明瞭に分かれていないサバで独立時にサバ連盟が成立したのはマラヤに合わせたためであって、サバの状況に適したものではなかったことを意味している。

1985年のPBS政権の誕生は国内外の注目を集めた。選挙によって野党州が誕生し、しかもその首班がキリスト教徒のカダザン人だったことから⁹、ムスリムのマレー人が優位であるマレーシアにおいて、宗教的にも民族的にもマイノリティである政治勢力が自治政府を組織したと見られたためである。もっとも、このことはサバの政党政治の展開からみれば珍しいことではなかった。歴代のサバ州政権はどれも2期9年で交代してきた。いずれも圧倒的な支持率で2期目に入るが、2期目に入ると政権の腐敗などが目立ち、党内のナンバー2が州首相と路線を巡って対立して議員や支持者とともに離党し、新党を結成して選挙で与党を破って政権党になるというパターンが繰り返されてきた。また、PBS政権が誕生するまで、州政府は自動的に連邦政府と協力関係を結ぶものであったし、サバでは連邦政府との関係は最小限のものであったため、州政府を選ぶ際に連邦政府との関係を考慮する必要はなかった。そのため、PBSが連邦レベルで野党でありながらサバの州政府を担うことになったことも、サバの政治から見れば驚くべきことではなかった。PBSは、カダザン人キリスト教徒のパイリンが党首だったが、執行部にはサバ州内のさまざまな民族が集まり、サバの多民族社会を反映した多民族包括型の政党だった。

2. PBS政権の誕生と倒壊

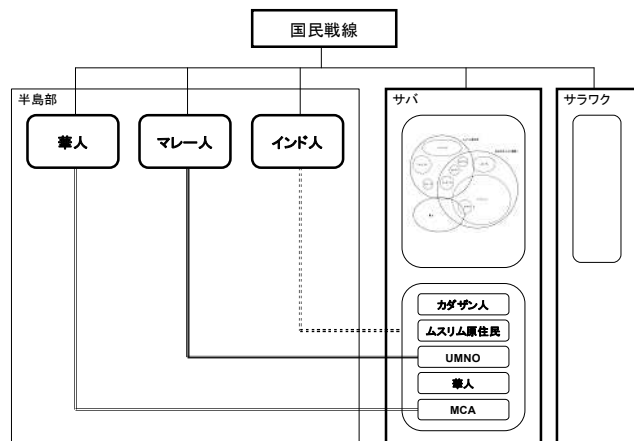
(1) PBS 政権の誕生

PBSは1985年に結成され、同年の州議会選挙でBerjayaを破って州政権についた。開票直後、選挙で破れたUSNOのムスタファとBerjayaのハリスが州元首官邸に駆けつけ、第一党になったPBSのパイリン党首ではなくムスタファを州首相に任命するよう強要した。サバ州議会では民選議席のほかに州首相が

⁸ 1971年、ムスタファに批判的な議員がUSNOを集団離党して統一サバ行動党 (UASP) を結成して選挙に出ようと準備を進めていたところ、これら53名の議員および支持者がUSNOの経費で海外研修に出ている間に州議会の抜き打ち解散と選挙が行われ、USNOとSCAの候補者が無投票で当選した。

⁹ 歴代の州首相の民族性は以下の通り。ステファンはクダット出身のユーラシア (欧亜混血) 人キリスト教徒、ピーター・ローはサンダカン出身の華人、ムスタファはクダット出身のスルック人ムスリム、ハリスはラブアン出身のマレー人ムスリム、パイリンは内陸部のタンブナン出身のカダザン人キリスト教徒。

図4 1991年以降の「民族の連邦」(概念図)



指名する6議席があり、USNOの16議席とBerjayaの6議席に指名議員の6議席を加えればPBSの25議席より多くなるというのがムスタファらの論理だった。いったんは州元首がムスタファを州首相に任命したが、首相代行を務めていたムサ・ヒタムがムスタファの州首相就任を認めず、パイリンが州首相に就任した¹⁰。PBS政権が誕生すると州都コタキナバルで爆弾騒ぎや車の焼き打ちが発生し、社会不安を解消するためにPBS政権は州議会を解散した。やり直し選挙ではPBSが48議席中34議席を獲得して州政権を維持し、Berjayaは1議席のみとなったためにハリスは政界を引退した。ムスタファ率いるUSNOは12議席を得て州野党の地位に留まった。PBSはBNへの加入が認められたものの、USNOも連邦レベルでBNに加入していたため、PBSとUSNOは州議会では与野党の関係にありながら連邦議会では与党どうしの関係となった。

PBS政権は「サバ人のサバ」を掲げて連邦政府に対して各種の要求を行った。これは、サバの独自性を維持したまま、サバをマレーシアの主流に位置づけようとした試みと理解できる。しかし、これによりPBS政権と連邦政府の関係は悪化し、両者の対立は1990年総選挙で頂点に達した。

1990年の選挙では、マラヤで46年精神党 (S46党) を橋渡し役として人民行動党 (DAP) と汎マレーシ

ア・イスラム党 (PAS) の野党共闘が成立したことを見て、PBSはBNを離脱して野党連合に合流した。PBSのBN離脱が立候補届出締め切り後に発表されたため、BNはPBSが候補者を立てた選挙区で対抗する候補を立てることができず、サバの20の選挙区のうちPBSが候補を立てた14の選挙区では無投票で野党議員 (PBS議員) が生まれることになった。

しかし、選挙の結果、連邦レベルでBNが政権を維持したため、PBSは厳しい立場に置かれることになった。マハティール首相はPBSのBN離脱を「裏切り行為」として強く批判して、1991年にBNの主要政党である統一マレー人国民機構 (UMNO) とマレーシア華人協会 (MCA) をサバに進出させ、USNOを基盤としてサバUMNOを設立し¹¹、また、PBS政権下でほとんど名目上の存在にすぎなかった人民正義党 (AKAR) や自由民主党 (LDP) などを結集してサバBNを設立した。これにより、サバの多民族社会が民族の境界に沿っていくつかに分けられ、ムスリム原住民はサバUMNOを通じて、華人はサバMCAを通じてそれぞれ国政に参加する経路を手に入れることになった (図4参照)。

(2) BN のサバ進出

BNのサバ進出により、BNの州政権奪回を掲げるサバBNと、サバ人によるサバ統治を目指すPBSの対立の時代となった。サバBNは「新しいサバ」を、PBSは「サバ人のサバ」をそれぞれ掲げて対立した。

サバBNはPBS議員を引き抜いてサバBN構成政党に移籍させたため、PBS政権は当選時の所属政党を離党したら議員を辞職しなければならないというサバ州議会の慣行を明文化し、移籍禁止条項として州憲法に盛り込んだ。しかし、連邦政府の訴えにより、結社の自由を定めた連邦憲法に抵触するとの判決を受け、移籍禁止条項は無効とされた。

また、連邦政府は1991年にサバに連邦開発局を設置し、従来の州政府一州議会議員ではなく連邦開発局一連邦議会議員という経路による開発計画を進めた。

1994年の州議会選挙ではPBS対サバBNの対決とな

¹⁰ 1994年の州議会選挙では、開票によりPBSが過半数の議席を押さえたことが判明すると、パイリンは直ちに州元首官邸に駆けつけた。州元首はパイリンとの面会を拒否し続け、パイリンは官邸前に停めた車内で30時間以上待つようやく州元首への面会が認められた。なお、このときパイリンに州元首に面会を求めるよう助言を与えたのは、PBS陣営に加わってBNと対立していたムスタファだった。

¹¹ 1984年、ラブアン島がサバから切り離されて連邦直轄区になり、UMNO支部が設立された。このため1986年の連邦下院選挙ではラブアン区でUMNOの立候補者が出た。

り、PBSが48議席中25議席を獲得して辛勝したが、選挙後にPBS議員がサバBNに大量に移籍したため、PBS政権は倒壊し、サバBN政権が誕生した。移籍したPBS議員は、UMNO、MCA、GerakanなどのBN構成政党のサバ支部に加入したり、カダザンドゥスン人¹²議員のバーナード・ドンボク率いるサバ民主党(PDS)¹³やジョセフ・クルップ率いるサバ人民団結党(PBRS)、華人議員のヨン・テックリー率いるサバ進歩党(SAPP)などの政党結成を通じて政党ごとサバBNに加入したりした。

こうしてサバでは1967年以来続いていた多民族包括型の政党による統治の時代が幕を閉じ、民族別政党の連合による統治の時代を迎えた。BNの選挙公約に基づき、サバではカダザンドゥスン人、ムスリム原住民、華人の3民族が州首相を輪番で担当する州首相輪番制が導入された¹⁴。もともと、サバ社会が民族的に明確に区切られていないという現実を踏まえて、サバBNを構成する政党の多くは、実態として多民族包括型としての性格も維持していた。

なお、1994年に成立したサバのBN政権は選挙を通じて有権者に選ばれたものではないため、その正統性を疑問視する声も出ていたが、1999年の総選挙ではサバBNが州議会の過半数を制し、サバBN政権が認められた形となった。

1999年の州議会選挙では、サバUMNOが48議席中24議席を獲得し、数の上では単独で州政権を担うことが可能となった。この後、2002年にPBSのBN復帰が認められ、州議会はすべて与党になった。2004年の州議会選挙から定数が60に増えると、サバUMNOは過半数の議席を占め、サバ政治におけるサバUMNOの優位が確立した。州首相輪番制は2003年に廃止され、サバUMNOの総裁が州首相を務めることになった。

¹² 1980年代末になると「カダザン人かドゥスン人か」の議論が再燃し、1989年にカダザン文化協会の決議により公式の民族名がカダザンドゥスン人とされた。(カダザン文化協会はカダザンドゥスン文化協会に改称した。)

¹³ 後に統一全国パソ・モモグン＝カダザンドゥスン人組織(UPKO)に改称した。1960年代のUPKOと組織上の関係はない。

¹⁴ 州首相輪番制は2003年まで続いた。州首相輪番制の導入については[山本1999]を参照。

3. BN進出後のサバの選挙

(1) BN 執行部による影響

マラヤの野党であるDAPやPASもサバに進出したが、いずれもサバでほとんど勢力がなかったため、マラヤにおけるBNと野党の対立関係はサバに持ち込まれず、サバ州内の政党間の対立がBN対野党という形で表れた。

サバBNには複数の政党が加入したが、その中でも政党として組織とサービス機能が充実していたのはサバUMNO、SAPP、UPKO、サバMCAの4党だけだった。ただし、MCAはマラヤに拠点を置く政党なので、サバの人々(特に華人)から十分な支持が得られていない。LDPとPBRSは、党首を含む数人の議員のみの政党である。このほかにインド人政党もあるが実体はない。

サバBNは、制度上、マラヤのBN執行部の指導を受ける立場に置かれている。例えば、これまでサバが独自性を維持してきた州議会の解散日や州・連邦の選挙の候補者名簿の決定にあたり、マラヤのBN執行部の指示と承認を受けたうえで決定を下すようになった¹⁵。もともと、候補者名簿についてはサバに持ち帰った後でサバの地元政治家たちの意見を聞いた「修正」も行われている。BN執行部による指示と承認は、サバの地元政治家たちが納得する限りにおいて意味が与えられており、むしろサバ内の政治家に対する説得の口実に使われていると見ることができる。

(2) 与党陣営——「BN 対 BN」

1990年代以降、サバではBN対野党の選挙戦が行われているが、これは実質的には「BN対BN」の戦いであると見ることができる。

サバの州議会選挙では州レベルやより小さな範囲での争点を巡って立候補者の選択がなされる。有権者や潜在的候補者にとって、州議会の選挙戦は、BNの候補者選びと立候補届出までが第一幕となる。

有権者は、自分が支持する政治家が議員に選ばれることを求め、同時に、自分の選挙区から当選した議員がBN議員であり、政府からの開発資金にアクセ

¹⁵ 1999年の総選挙では、サバで州首相が州議会の解散を発表する前にマラヤの新聞でサバ州議会の解散が報じられたことがあった。

スできることを求める。そのため、望ましい候補者を推し、BN構成政党を通じてBNの公認候補になることを期待する。ただし、小選挙区制をとるためBNの公認は各選挙区に1人しか認められない。BN構成政党の指名から漏れた場合、あるいはBN構成政党の指名を受けられずBNの公認から漏れた場合、独自資金または資産家の支援があれば無所属で立候補し、そうでなければ野党から立候補することになる。

野党から立候補しても、当選後にBNに移籍すれば、有権者にすれば自分たちが支持する候補者をBN議員として送り出すことになる。つまり、選挙にBNから出るか野党から出るかは大局的にはそれほど重要でなく、まず立候補して、当選したらBNへの加入を考えればよいということになる。別の角度から見れば、BNと野党のどちらの候補者が当選しても、結局はBN議員が誕生することになる。このため、1990年代以降のサバの州議会選挙は「BN対BN」の戦いであったと見るができる。

なお、サバでは伝統的に州議会の方が連邦議会よりも重要であり、重要な政治家は州議会議員となることを求め、連邦議会では州議会議員がかけ持ちをする場合や新人候補者を立てたりすることがよく見られた¹⁶。ただし、1991年にサバに連邦開発局が置かれて連邦議会議員を通じて開発プロジェクトが実施されるようになると、主要な政治家が州議会から連邦議会に鞍替えする例も見られるようになった。

(3) 野党陣営——「政党売ります」

BNの公認から漏れた候補者が野党から立候補する場合、どの政党から立候補するのか。PBSが野党だった時代には、PBSが野党候補者を生み出す役割を担ってきた。それに加えて、かつて木材生産業などで財を成した政治家に後援を求めることもある。例えばジェフリー・キティガンやハリス・サレーがそれに当たる。

選挙が近づくと、有権者は有力な資産家に対し、政治家の腐敗や墮落を嘆き、選挙に参加して世直しすることを求める。選挙に参加するには政党が必要

だが、新党を設立すれば結社登録に時間がかかり、選挙に間に合わない可能性がある。これに対し、かつて政党として登録され、選挙では議席が得られなかったけれど解散せずに形式上の年次総会と会計報告だけ行って政党としての登録を維持している政党がいくつかあり、それを使うようオファーが出る。いわば、すでに登録済みの政党を「買う」わけである。こうして資産家は政党を手に入れ、党首となり、選挙資金を出して候補者を立て、選挙戦を戦うことになる。

1999年の州議会選挙では、引退したハリス元州首相が政界復帰してサバ民衆団結戦線党 (Bersekutu) の党首となった。Bersekutuの候補者はハリスを含めて1人も当選しなかった。選挙後、ハリスは政界からの再引退を表明し、Bersekutuは登録だけの政党になった。この種の政党として、サバにはSetiaやPasokなどいくつかの政党がある。

BNから公認が得られなかった候補者が野党から立候補する際に、従来はサバの野党からしか立候補しないという慣行が見られた。マラヤに基盤を置くPASやDAPもサバでいくつかの選挙区に候補者を立てているが、BNの公認が得られなかった候補者がこれらの政党から立候補することはほとんどなかった。しかし、2008年総選挙ではジェフリー・キティガンの仲介によってマラヤに基盤を置く人民公正党 (PKR) からサバで多くの候補者が立候補している。野党側でも選挙資金をマラヤの政党から得るようになったことが、今回の選挙からサバで見られるようになった変化の1つである。

4. 2008年総選挙

(1) サバの選挙の語られ方

まず、サバにおける選挙の語られ方をまとめておきたい。サバの選挙では、「不法移民が投票した」「政府がカネをばら撒いた」「政府が不正行為をした」などの言い方がなされることが少なくない。

マレーシアの選挙制度では選挙区ごとの有権者数が少なく、サバやサラワクではとりわけ少ない。与野党それぞれから候補者が出され、それを支える支持者がいて、自陣営の候補を勝たせようと選挙活動を行っている。選挙区によっては数百票の差で当落が決まることも珍しくない。選挙過程での各陣営の

¹⁶ サバでは同時に州議会と連邦議会の議員になることが認められている。

相互監視は厳しく、仮にその選挙区でなじみのない多数の外国人が投票場を訪れた場合、それが問題にならないことは考えられない。

しかも、サバでは選挙で負けた候補者が選挙後に相手陣営の当選無効の訴訟を起こすことが珍しくなく、州首相経験者が選挙運動期間中の不正行為によって当選無効の判決を受けたこともある。何らかの形で金品や便宜供与の見返りに投票を求めることがないわけではないが、相互に監視しあっている状況で、誰の目にも明らかな形で金品をばら撒いたり不法移民に投票させたりするという不法行為が行われているとは考えにくい¹⁷。

また、マレーシアでは、公務員は政府によって雇用されているという論理により、公務員は選挙の際に職務上は与党を支持するようふるまうことが求められるが、サバではPBS政権時代から公務員に野党支持者がいることが社会的に了解されており、公務員が与党に不当に有利な行動をとると野党から選挙違反として訴えられる可能性がある。サバでは郵便投票の不正操作が噂されることもあるが、上記の理由から、選挙結果を左右するような操作は行われていないものと一般に考えられている¹⁸。

(2) 選挙運動

マレーシアの選挙では、各政党が作戦室を設置し、政党ごとに選挙運動を展開する。BN陣営では、政党ごとに作戦室が作られ、それらをBNの作戦室が統括する。BN陣営では、選挙運動期間が始まるとBN候補の当選が危うい選挙区が挙げられ、それらの選挙

区に焦点を当てて選挙運動が展開される。さまざまな形で交渉が行われ、BN候補への投票依頼だけでなく、対立候補に対する立候補取りやめや選挙運動の中止を求めることもある。何らかの決着がついて対立候補が選挙運動を中止すると、その選挙区はBN候補の当選が確実な選挙区とみなされる。こうして作戦室に日々の選挙運動の結果が報告され、作戦室の地図上でBN候補の当選が危うい選挙区が日々少なくなっていく。今回の選挙では、投票日の数日前にBN候補が負ける可能性があると言っていた選挙区は3つか4つ程度となっていた。

(3) 選挙結果

2008年の選挙では、サバでは、連邦・州レベルともに1選挙区を除いてすべての選挙区でBNが勝利した。事前にBNの候補が落選する恐れがあるとみられていた選挙区はLDPが候補者を立てた選挙区だった。LDPは組織面でもサービス面でもほとんど政党として機能していないことから、LDPが議席を失ったらSAPPが吸収合併してサバの華人政党を一本化し、BN内での発言力を増そうとする考え方があった。そのため、BN構成政党どうしでありながらSAPPがLDPの候補者を支援しない状況が生じており、地区によってはSAPP党員がLDPの対立候補を応援しているという情報もあった。しかし、選挙の結果、LDPが候補者を立てた3つの選挙区ではいずれもLDPの候補者が当選した。

2004年に続き、2008年の選挙でもサバではほぼすべての議席をBNが獲得した。しかし、これまで見てきたように、マラヤとサバの政治は切り離されており、マラヤのBNによるサバ支配が強まったわけではないことはすでに明らかだろう。

むしろ、今回の選挙を契機にサバの枠組による自治を強化する方向での動きも見られる。選挙後にサバBN構成政党がアブドゥッラー首相に連邦開発局の廃止を申し入れたのがその例である。また、連邦の大臣に任じられたサバ選出議員が大臣就任を辞退した例もある。今回の選挙でサバではBNが圧勝したが、このことはマラヤのBNによるサバ支配の強化を意味しているのではなく、マレーシアにおけるサバの自立が強まる方向に向かう契機となったと考えるべきだろう。

¹⁷ マレーシア国民でない人物がサバで正規の手続きによらずマレーシア国民の身分証明証を入手し、有権者として登録されている例は多く報告されている。このような「外国人による不正投票」の問題はあるが、これは選挙と別に外国人登録の問題として解決されるべきものである。いずれにしろ、「外国人がボートや車で投票所に集団で乗り付けて与党候補に投票する」という意味での「外国人による不正投票」が現在のサバで広く行われているとは考えにくい。

¹⁸ サバの人々は、国内の政治や行政で解決できない問題を外国人に批判させることで解決を図ろうとすることがある。そのため、サバの人々がここに挙げたようなことを部外者に話すことがあるかもしれないし、部外者としてはそれを問題にすることでサバ社会の問題を改善する外圧となることを引き受けることには一定の意義があると考えられる。しかし、事実を明らかにしようとするときに検証なしで噂話を採用するのは適切な態度であるとは思えない。

また、サバがマラヤの政治と切り離されていることを考えるならば、サバのBN議員が条件しだいで野党連合に移籍することも十分ありうることになる¹⁹。冒頭の図1を改めて見ていただきたい。連邦議会では与党BNと野党人民協約（PR）はそれぞれ140議席と82議席を占めているが、マラヤだけを見ればBN対PRは85対80となっている。サバとサラワクはマラヤの政治と切り離されているため、支持者のレベルでBN対PRという対立関係はなく、サバやサラワクのBN議員にとって、条件さえ整えばPRに移籍することへの抵抗はほとんどない。いまや、いつサバやサラワクのBN議員がまとまってPRに移籍し、連邦政府で与野党が逆転するかわからない状態なのである。現実には政権交代が起こるかどうかはともかく、PRが勢力を伸ばし、マラヤでBNとPRの二陣営の勢力が拮抗すればするほど、サバ（およびサラワク）選出の議員がマレーシア政治において重要な役割を担っていくことは確かだろう。

4. おわりに

（1）「サバ人のサバ」のゆくえ

1980年代から1990年代にかけてサバ政治の争点となっていた「サバ人のサバ」とは何だったのか。

「バンサの連邦」という性格を持つマラヤ連邦を基礎に成立したマレーシアでは、公認のバンサに所属しないと国政レベルでの意思決定に参加できないと認識されている。公認のバンサとはマレー人、華人、インド人の3つであり、この3つの枠組でなければ、たとえ文化的独自性のために他と明確に区別できる集団であったとしてもバンサと認知されず、したがって国政レベルの政治参加に単独で代表を派遣する枠組として認知されない。

1980年代にPBSを担ったカダザン人（カダザンドゥスン人）の試みは、マレーシアにおいて自分たちが正当に代表されることを求めて、バンサとしての

地位を得ようとしたものであったと解釈できる。バンサの地位を得るには3つの可能性が考えられた。第一に、公認バンサのいずれかの一員になる方法である。この場合、可能性で言えばマレー人、華人、インド人のうちもっとも起こりうるのはマレー人に加わることだろうが、キリスト教徒を多く擁するカダザン人が総体としてムスリムのマレー人の一員になるには心理的抵抗が大きく、実現可能性は低い。第二に、カダザン人が単独でバンサとして認知されることは、カダザン人の人口規模などを考えると実現可能性が低い²⁰。残る可能性は、すでに機能としてバンサに準じる枠組であるサバをバンサとして認知させることである。サバ内は文化的に多様な人々から構成されているが、マラヤの3つのバンサもそれぞれ内部は文化的に多様であり、内部の多様さゆえにサバが1つのバンサと認められないと考えるべき理由はない。サバがバンサとして認知されるには、まずサバの人々に文化的一体感を自覚させることが必要になる。「サバ人のサバ」とは、サバの人々にサバ人意識を与え、それによってサバにバンサの地位を与えようとした試みであったと解釈できる。

これに対し、マラヤの主流民族は、サバをバンサとする要求を認めなかった。そのかわり、マラヤの民族別政党をサバに進出させ、サバの多民族社会をいくつかに分けてブミプトラと華人をそれぞれマラヤの主流民族と結びつけることで、サバの人々に公認されたバンサへの所属を与えようとした。

これにより、サバのブミプトラや華人は、サバという従来の枠組に加え、BNの枠組を通じて国政に代表を派遣することもできるようになった。この過程で、サバの政治指導者からはサバの州自治の基礎となるマレーシア結成時の「20項目の保障規定」の見直しが唱えられるなど、サバという枠組の自律性を弱めようとする動きも見られた²¹。

サバをバンサにしようとするPBSの試みは受け入

¹⁹ サバにはUMNOやMCAなど半島部に拠点を置く政党の支部があるため、サバの政治は半島部の政治と完全に切り離されているわけではない。しかし、本稿でも述べたように、これらの政党のサバ支部は半島部の党執行部の指示に過度に束縛されずに自律的に活動しており、その意味で「マラヤの政治と切り離されている」としても言い過ぎではない。

²⁰ カダザン人をバンサとする可能性が全く考慮されていないわけではない。カダザン人の収穫祭をマラヤでも行うようにしたのはその試みの1つであると解釈できる。PBSが1990年代にサバ州以外への進出を試みたこともこれと重ねて理解できるかもしれない。

²¹ 「20項目の保障規定」については、さしあたり【山本1996】を参照。

れられず、サバは機能としてバンサに準じる役割を果たしながらも、バンサとしての扱いは認められず、「州」として扱われることになった。

(2) バンサから州へ

本稿を閉じるにあたり、サバから見たマラヤにおける今回の総選挙の結果について検討しておきたい。今回の選挙では、「民族の政治」の限界を感じた人々による投票行動の結果、マラヤでは民族別政党の有力指導者が落選したり、民族によらない社会建設を唱える野党が議席を伸ばしたりした。また、州議会で与野党の勢力が逆転し、複数の州で野党政権が誕生した。

従来はBNの中央―支部関係が連邦政府と州政府の関係と重なっていたため、州の枠組はほとんど独自性を持たないものだった。しかし、野党州が成立したことで州の枠組がさまざまな局面で意味を持つようになり、マラヤでは人々が州の枠組を意識しはじめている。

州元首による州首相任命、議員移籍禁止法、連邦開発局の設置など、今回の選挙後にマラヤの各州で起こりつつあることは、いずれもサバが経験してきたことである。今後、マラヤ諸州でも連邦・州関係の綱引きが行われ、何らかの形で州の独自性が強まる可能性も十分に考えられる。

1980年代から1990年代にかけて、サバでは人々がPBSに結集してバンサとしての地位を手に入れようときまざまな努力を重ねてきた。しかし、サバがバンサであるとの認知は得られず、サバに与えられたのは「州」としての地位の再確認であった。これに対し、50年に及ぶ「バンサの政治」のなかで暮らしてきたマラヤで、現状のバンサの枠組の妥当性を疑い始めた人々の目の前に現れたのは、皮肉にも、サバの人々がバンサのかわりに与えられた「州」だったのである。

参考文献

日本語

山本博之 1996 「「20項目」問題と連邦・州関係：1950年代カダザン民族主義の復活とその限界」原不二夫・鳥居高編『国民開発政策(NDP)下のマレーシア』アジア経済研究所、pp.131-149。

山本博之 1999 「マレーシア・サバ州の州首相輪番制

の導入で問われるもの」『アジア研ワールド・トレンド』アジア経済研究所、42:82-88。

山本博之 2006 『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。

山本博之 2008 「プラナカン性とリージョナリズム：マレーシア・サバ州の事例から」『地域研究』、8(1):49-66。

英語・マレー語

Anuar Sullivan & Leong, Cecilia (eds.). 1981. *Commemorative History of Sabah, 1881-1981*. Kota Kinabalu: Sabah State Government.

Ariffin Omar. 1993. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community, 1945-1950*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Kitingan, Jeffrey G. & Ongkili, Maximus J. (eds.). 1989. *Sabah: 25 Years Later, 1963-1988*. Kota Kinabalu: Institute for Development Studies (Sabah).

Lee, Edwin. 1976. *The Towkays of Sabah: Chinese Leadership and Indigenous Challenge in the Last Phase of British Rule*. Singapore: Singapore University Press.

Luping, Herman James. 1994. *Sabah's Dilemma: The Political History of Sabah (1960-1994)*. Kuala Lumpur: Magnus Books.

Milne, Robert Stephen. & Ratnam, K. J. 1974. *Malaysia: New States in a New Nation: Political Development of Sarawak and Sabah in Malaysia*. London: Frank Cass.

Ongkili, James P. 1972. *Modernization in East Malaysia, 1960-1970*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Roff, Margaret Clark. 1974. *The Politics of Belonging: Political Change in Sabah and Sarawak*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Ross-Larson, Bruce. 1976. *The Politics of Federalism: Syed Kechik in East Malaysia*. Singapore: Bruce Ross-Larson.

Tilman, Robert Oliver. 1976. *The Centralization Theme in Malaysian Federal-State Relations, 1957-1975*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.